

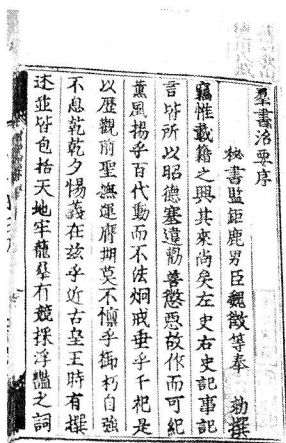
[資料紹介] 『群書治要』

著者	古川 富美子
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	1
ページ	25-26
発行年	1995-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022191

『群書治要』

古川 富美子

本学図書館貴重書庫に所蔵する『群書治要』五十卷（巻四・十三・二十原闕）四十七冊は、枯葉色表紙に題簽無く、巻数を示す墨書きの小紙片を貼付してあるのみ。和袋綴、有界四周雙邊、8行17字、注雙行、柱心「群書治要（巻数）（丁数）」、花口魚尾、匡郭21cm×15.5cm。「舊和歌山徳川氏藏」「紀伊徳川氏藏板記」「南葵文庫」「大槻如電」「高木家藏」の印記がある。句読訓点等は加えられておらず、序跋、刊記も無い。金沢文庫旧藏鎌倉時代鈔本を底本とする、「駿河版」銅活字本である。



『群書治要』は、貞観5年（631）、唐の太宗の勅命により、秘書監魏徵が政治の要道を60余種の古典から採録し、原書毎に編纂し五十巻の書としたもので、唐朝治世の基本とされていた。しかし、中国では早くに亡失している。

日本には、奈良時代遣唐使によってその写本が伝わり、歴代天皇に重んじられていた。

鎌倉時代、北条実時・貞顕が書写し清原教隆らが加点了ものが、実時が創設した金沢文庫に置かれていた。卷子本全五十巻で、現伝本の祖本とされるものである。（現宮内庁書陵部蔵、存四十七巻四十七軸）

この金沢文庫旧藏本を徳川家康が入手し、「駿河版」の底本としている。巻四・十三・二十は、家康の入手当時既に欠けていた。

「駿河版」は、学問を重んじ古典籍の蒐集や書物の刊行に熱心であった、徳川家康が起こした開版事業の一つである。

家康の開版は2期に分かれる。まず、慶長4年（1599）から11年（1606）にかけ、京都伏見の円光寺において、同寺の僧閑室元佶らに命じ新彫の木活字を用いて、『孔子家語』『六韜』『三略』『貞観政要』等11種の書物を印行した。その出版の地名から「伏見版」と呼ばれる、家康最初の開版事業である。

次いで、「伏見版」から約10年のち、大御所とな

り最晩年を過ごした駿府の地で、林羅山、以心崇伝（本光国師）に命じ、『大蔵一覽集』と『群書治要』の開版を行っている。これが「駿河版」であり、銅活字を用いて印行したことが、その最大の特徴とされるものである。

「駿河版」の二書に序跋、刊記は無いが、『駿府記』や『本光国師日記』から印行の詳細を知ることができる。以下、『本光国師日記』の記述に沿って『群書治要』刊行の過程を辿ってみる。

元和2年（1616）1月19日、家康は『群書治要』開版の命を發し、羅山と崇伝は京都所司代板倉勝重に活版職人23人の手配を依頼している。その内訳は「二人木切 三人彫手 拾人植手 五人摺手 三人校合 以上貳拾三人」である。命令が下された直後の1月22日に家康は発病。1月25日、板倉勝重の返書に、職工20人は間もなく京都を出発するが、校合の3人が得られないとある。家康は校合のために五山の僧を召致するよう指示、2月7日羅山らは板倉勝重にその旨伝えている。2月14日、板倉勝重から五山の僧が間もなく京を出立するとの返書が届く。2月23日、城内三の丸能舞台において印刷に着手することとなり、「群書治要板行之間諸法度」が定められる。「朝者卯之刻より被出。晩者酉之刻以後可有休息事」「高談付口論等。一切有之間敷事」「人々私之知人引候見物など入間敷事」「群書治要板行之間。奉行人。役者衆之外。無用衆出入有間敷者也」等厳しいものである。2月25日、『大蔵一覽集』の印行に用いた銅活字を使用することとなり、不足の活字1万3千余を駿府において補鑄するよう明人林五官に命じ、助手の職工の手配と、字母に使用する「後漢書之切本」の送付を板倉勝重に依頼。2月27日、『群書治要』の印刷に使用する銅活字その他道具一式が、羅山から畔柳寿学に渡される。2月29日、校合のための五山の僧の一部が駿府に到着。3月5日、家康は病床にありながらも、「板器之儀。無油断三之丸ニ而申付候。急可申旨 御諒ニ候故。各無油断候。

…」と『群書治要』の印刷を急がせている。3月10日、家康の指示により崇伝は、底本である金沢文庫旧蔵本の欠巻の補充と校合のため、著名な蔵書家であった直江山城守兼統に『群書治要』の異本を求める書状を送っている（欠巻のまま伝わっていることから補充はできなかったと考えられる）。4月17日、『群書治要』の完成を待たずして家康薨去。印刷は5月末頃に完了したとされる。

完成した書物は、銅活字その他印刷道具と共に駿府の官庫に置かれたままであったが、元和5年（1619）、駿府城主徳川頼宣の紀州への転封に伴い和歌山に運ばれている。『大蔵一覽集』は完成後、家康の朱印を捺し諸寺に寄進しているが、『群書治要』はほとんど外部に出ることがなかった。幕府の紅葉山文庫の蔵書となったのも、元文5年（1740）、頼宣の孫の吉宗が、出身の和歌山藩から取り寄せたことである。明治になり、紀州藩から出たものには「紀伊徳川氏蔵板記」の印記があり、本学所蔵のものにもこの印記が捺されている。また、「駿河版」の印刷部数については、『大蔵一覽集』は『駿府記』に125部と記されているが、『群書治要』にはこのような記録がなく不明である。

弘化3年（1846）、紀州藩において「駿河版」の銅活字に木活字を補彫し、『群書治要』の再印が行われている。弘化3年版は25冊本で、山本元恒の「活字銅版群書治要序」が首にあり、柱心の形式も「駿河版」とは異なる。

また、これより先の天明7年（1787）、尾張藩においても『群書治要』の翻刻を行っている。首に林信敬「校正群書治要序」（天明7年）、細井徳民「刊群書治要考例」（天明5年）のある25冊本、木版本である。（本学「内藤文庫」所蔵）。この天明版（尾張版）が母国の中国に伝わり、阮元の『四庫未収書目提要』に著録され、楊靈石の『連筠簪叢書』に収められるなどしている。

「駿河版」は、現存する我が国最初の銅活字本とされているものである。木活字が大半を占める古活字版のなかであって、銅活字による印行は稀である。日本で最初に印行された銅活字本は、豊臣秀吉が文禄の役に際し朝鮮より将来した活字・道具を用いて、文禄2年（1593）11月に後陽成天皇が印行した、「文禄勅版」の『古文孝経』である。次いで、家康の「駿河版」となるが、『古文孝経』は『時慶卿記』に印行の記録があるものの、未だ伝存が確認されていないのである。

この「駿河版」の印行に用いた銅活字が、朝鮮からの将来品であるのか、日本で新鑄したものかは明確でない。

しかし、『駿府記』に『大蔵一覽集』の開版に当たり、家康が「幸銅字廿万字有之由被仰出」と述べたとあり（その数字については疑義があるものの）、慶長19年以前に駿府城に銅活字が置かれていたことが記されている。また、舟橋秀賢の『慶長日件録』には、「伏見版」の開版を行っていた円光寺において銅活字大小91,261個を鑄造させ、慶長11年6月に家康が後陽成天皇に献上している記述がある。さらに、『本光国師日記』の記述に『群書治要』印行の際、不足の銅活字を駿府において鑄造するため「後漢書之切本」の送付を依頼する書状に、「先年圓光寺鑄字被仰付候時…」とあり、板倉勝重からの返書には「圓光寺之時被 仰付候鑄字…」とある。この「鑄字」が、後陽成天皇に献上した銅活字を指すと考えられている。

これらの文献や、朝鮮の活字に「駿河版」と同じ字様のものが発見されていないことなどから、「駿河版」の二書には、後陽成天皇に献上した活字と同種のものを用いたと推測されている。

その出所が明確ではないといえ、「駿河版」の銅活字は印刷文化史上貴重なものである。

弘化3年7月の雷雨による和歌山城天守閣の消失や、維新後の紀州家の東京への移住などで銅活字の多くは失われ、現存しているのは銅大字866個、銅小字31,300個である。これを『大蔵一覽集』印行時の数と比べると、銅大字は67,490個に対し866個と大部分が散佚しているが、銅小字は32,682個に対し31,300個と殆どが保管されていたことになる。

「駿河版」に用いられた銅活字と印刷用具一式は、現在、凸版印刷㈱の所有にあり、重要文化財の指定を受けている。

参考文献

- 川瀬一馬著『増補古活字版の研究』〔東京 日本古書籍協会〕1967
 福井 保著『江戸幕府刊行物』東京 雄松堂書店 1985
 福井 保著『内閣文庫書誌の研究』東京 青裳堂書店 1980
 橋井清五郎著『古版書誌論考』東京 青裳堂書店 1982
 川田久長著『活版印刷史』東京 印刷学会出版部 1981
 『国史大辞典』東京 吉川弘文館 1979-1993

くふるかわ ふみこ 収集整理課